

感謝の思い

渡 部 泰 明

宮坂先生の思い出を語るように、というご依頼を頂戴したのだけれども、私がフェリスに奉職していたのはわずか五年間、しかも二十年ほど昔のことである。とても思い出を語る任にふさわしいとは思われない。けれど、こういうとつくだに出ていった者をも昔がたりの一員に加えてくださるところにこそ、フェリスならでの温かさがあるのだな、と思わずにはいられない。それはまた、フェリスを率いて来られた宮坂先生の温かさにつながる。確かに私には、どうしても感謝しておきたいあの頃のことがある。

私がフェリス女学院大学文学部に赴任した一九八八年四月、宮坂先生はちょうど学生部長の職にあられた。三十一歳で専任講師に着任し、大学の組織・制度など右も左もわからないひよっこだった私は、その事初めの行事である入学式の場で、忙しく走り回っておられ、たまたまお隣の席に着いた宮坂先生に、「ガクセイ

ブチヨウというのは、激務なのですね」と話しかけた。すると「キムですよ！」というお返事が即座に返ってきた。その屈託のない明るい響きに、初任日の緊張感がいつきに和らいでいった。あやまたず、その明朗さが宮坂先生のお人柄に由来するものであったことは、その後よく理解することになった。例えば、着任早々、宮坂部長のもとで学生委員として務めることになったが、私などの新人にも実に気さくに意見を徴してくださり、そうした明るく活発な委員会の運営によって、フェリスにすみやかに溶け込めるよう促していた。だいた。

大学の運営に関してもそうだけれども、なにより宮坂先生に学ぶこととなったのは、先生の教育方法であった。学生はほつたらかしが一番、指導などしてもいけないし、できると思ってもいけない、という教育方針の大学で十数年育ってきた私は、非常にシ

ステマティックに整備された宮坂先生の学生指導に、驚倒した記憶がある。学生に手を抜く隙を与えず鍛える方針に、びっくりしたのである。とくに議論に議論を重ねるよう導いてゆく先生のゼミの方式は特徴的で、だから、宮坂ゼミには、議論好きの猛者が集まっていた。こんなこともあった。私の演習の授業に、その宮坂ゼミ所属の学生が複数出席していた。彼女らは、後輩たちの発表に対して、活発に発言していた。ようするに、厳しく批判していたのである。そうした批判を受けていた二年生には、渡部ゼミに入ると、こういう怖い先輩がいると思ひ込み、他のゼミに入ることを決めた者がいた。その中には宮坂先生のゼミを希望する者もいたらしく、「せつかく怖い先輩から逃げたつもりだったのに、こつちにいたあ、というわけなのです」と、宮坂先生はにこやかに教えてくださった。

もつとも、当時の私は、必ずしも宮坂先生の教育方針を全面的に是としていたわけではなかった。ほつたらかしをよしとする学校を出ただけに、あまり絞り上げる教育では、学生の自主性が育たないのではないかと、という思いもあったのである。宮坂ゼミの教育の成果として、指導学生の卒業論文の充実ぶりは目を見張るものであった。原稿用紙実質五十枚以上とする条件を満たすのに汲々とする者の多い中、百枚・二百枚を超える学生も少なくな

かったと記憶している。そんなある日、宮坂ゼミの過去の卒業生の話になり、五百枚を超えたという卒業生の話になって、「宮坂ゼミの人の卒論は本当に大部のものが多くて」と讃嘆の声がその場から上がった。生意気盛り、当時三十代前半の私は、「指導が悪いんじゃないですか」と口を滑らせてしまった。もちろんジョークのつもりだったのだが、ゼミの成果の象徴である卒論に関してであることを考えると、これは完全に言い過ぎであった。あまりに手を掛ける指導だから、必要以上に長くなってしまっているのでは?という批判めいた気持がないわけではなかっただけに、始末が悪い。今思い返しても冷や汗が出るが、その時宮坂先生は、「そう、始末が悪いんですね。もつと書けたはずですよ」とすかさずおっしゃった。お得意の駄洒落で、ちよつと緊張をはらみかねなかつたその場の空気を、軽く受け流してくださった。信念は揺るがさず、しかし和やかさは失わず、という宮坂先生の行動原理を見たように思った。先生が、たくさんの方々の方々の支持のもと、大学の要職を担い続けてこられた理由の一端が垣間見えると言ったら、大げさに聞こえてしまうだろうか。

そのほつたらかしを旨とする母校の教員となつて、私の悩みは、もうほつたらかしでは通用しない、今の学生はそれなりに導いてやらなければ、ではどうすれば?ということであった。そういう

時、フエリスで知った、宮坂先生を筆頭とする諸先生方の教育方法を、決まって思い出すことになる。あの頃の体験が、いまでも生きていることを、改めて感謝申し上げたい。そして宮坂先生、激務から解放されるこれから、ますますお元気で。

(元本学教員、現東京大学)